The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Discourse Development Strategies in Japanese TV Interviews
Author(s)	高木, 佐知子
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41320
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	高　木　佐知子（たかぎ　さちこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　14764　号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	Discourse Development Strategies in Japanese TV Interviews （日本語のテレビインタビューにおける談話発展のストラテジー）
論文審査委員	（主査） 教　授　津田　葵 （副査） 教　授　仙葉　豊　　教　授　三牧　陽子　　助教授　沖田　知子

論文内容の要旨

ことばの研究は，古くて新しいテーマであり，それぞれの時代に特有の方法論の下で，さまざまな研究がなされてきた。一例をあげれば，ヨーロッパを中心とした比較言語学，歴史言語学であり，アメリカにおける記述主義言語学であり，また，近年目覚ましい発展を遂げた生成文法理論などである。これらの研究の主な対象としては，音素，形態素，意味といった，言語形式と意味内容の考察が中心であり，それらが1つの文を上限とした範囲において考察されてきた。しかし，ことばをコミュニケーションという側面から考えた場合，1つの文だけでは説明が困難な場合も多々あり，どうしても談話のレベルまで考慮する必要が生じる。このような背景のもとで，ようやく20年程前から，日常生活におけるさまざまな言語使用の有様に関する，談話の研究が社会言語学を中心に活発に行われるようになったのである。

本論文が提示するのは，社会言語学の1分野である談話分析に基づく研究である。分析の対象は，NHK テレビの「スタジオパークからこんにちは」という生のインタビュー番組である。この番組では，男女2人の司会者が1人のゲストを約40分間インタビューしているが，20名程の観客がスタジオ内でそのやり取りを聞いており，この観客の存在が本インタビュー番組の大きな特徴となっている。番組では2人の司会者間のやりとり，司会者とゲストのやりとり，司会者・ゲストとスタジオの観客との意味の交換，ファックスによる視聴者の質問とスタジオからの返答というように，4次元でのやりとりが同時進行している。本研究では，このような多重構造の中において特に，司会者がゲストに対してどのようなストラテジーを駆使することによって会話が進行し，その結果スタジオの観客を引きつけるのかについての実証的な検証を行う。その目的は，直接話しかけられることのない立場にいる第三者の存在を意識した会話を考察することにより人間のコミュニケーションのダイナミックさを明確化することである。

分析の方法論やデータの取扱いについては，種々の談話分析のアプローチを概観した上で，選択を行った。まず，発話行為理論は，適切性の各条件により発話の機能を明確化する。変異理論は，話し手の社会的立場や他者との社会的関係を，その人の発話の特徴から明らかにする。また，グライスの語用論は，「協調の原理」に基づいて話し手の含意を表面化する。さらに，コミュニケーションの民族誌は，コミュニケーション成立の諸要素間の関係を捉えることにより，その文化固有の言語行為を提示する。会話分析は，われわれが社会的知見を駆使しながら秩序ある会話を行っている実態を明らかにする。以上のように，各アプローチは発話の機能や話し手の意図，社会的立場，文化的規範など，それぞれ異なったコミュニケーションのある一定の側面を考察するのに有効であると考えられるが，相互作

用的社会言語学は，より包括的な談話分析を目指す方法論である。このアプローチは，種々の社会文化的背景を持つ会話者どうしが相互に発話の意味を推論し理解していく過程の明確化を図るものである。そして，前述した5つのそれぞれの方法論の視野も含みながら，とりわけ，談話のダイナミックさに対して経験的な分析を行い，トピックの焦点や話し手と聞き手の立場が刻一刻と変化する現実の談話において，われわれはどのように理解し合いながらコミュニケーションを進めているのかという点までも明らかにすることを目指す。したがって，会話の動的側面の明確化を試みる本研究の枠組みとしては，この相互作用的社会言語学が最も適切であると判断した。実際，本研究では，この方法論の「フレーム（frame＝行為の意味づけ）」，「フッティング（footing＝対話者との関係）」，「参加の枠組み（participation framework＝発話における位置づけ）」などの概念を分析の中心的な道具立てとして用いることにより，会話者および観客の推論の過程，そして会話における彼らの位置づけについての洞察を深めることが可能となった。さらに，「スキーマ」の概念を援用することで，意味伝達や解釈の規範と社会文化的要因との関連についても考察を進めることができた。

本研究の意義としては，特に第三者が意識されていることを前提としながら，意味の伝達メカニズムを明らかにしようとしていること，他の方法論では把握が困難と思われる会話のダイナミックさを具体的に捉えようとしていることが挙げられる。さらに，この種のインタビュー番組を題材とした談話研究，中でも，相互作用的社会言語学の方法論を駆使した経験的，実証的研究は本論文が最初であるということも強調したい点である。

本研究において，16回分のインタビュー，すなわち約10時間に及ぶ会話を録画し文字化した。これらのデータを分析し考察を加えることにより，インタビューの発展に寄与しているストラテジーは以下の3種類に収束できるという結果を得たのである。

1）相手の発話に対する解釈や仮説を提示する。2）トピックの維持または発展において，相手の反応や確認を得る。3）フィラー，ヘッジ，バックチャンネルの提示により会話を発展させる。この3種類をそれぞれ，1）「発話内容の組織立て」（formulating）2）「トピックコントロール」（topic control）3）「あいづち」（back channel）と呼ぶことにして，その機能の種類ごとに下位分類を行った。つまり，1）の「発話内容の組織立て」に関しては，「発話内容の明確化」（clarifying），「発話内容の具体化」（materializing），「発話内容の言い替え」（redefining），「発話内容の検討」（examining），「発話内容の結論づけ」（summarizing and concluding）である。また，2）のトピックコントロールについても，「トピックに関する説明」（explaining），「トピックに関する相手への要求や要請」（requiring），「トピックに関する質問」（questioning），「トピックに関する感想やコメント」（commenting），「トピックに関する事実の確認」（confirming）となった。3）の「あいづち」については，「『続けて』というシグナルの伝達」，「内容理解の提示」などの機能に加え，「繰り返し発話としてのあいづち」が，感情や理解の表明として談話発展のストラテジーの機能を果たしていることがわかった。

さらに本論文では，以下のことが明らかになった。すなわち，司会者はフレームや自分のフッティングを変化させたり発話における位置づけを調節しながら，トピックに関する詳しい発話をゲストから引き出して観客に提供しているということ。観客は，スキーマを喚起することによって，提供された発話をよりよく理解するため，直接的な聞き手となっているということ。また，このスキーマの喚起が可能なのは，観客を含む参加者全体が社会文化的背景を共有しているという理由からであることもわかった。そして，観客は発言権を持つことを許されてはいないものの，司会者やゲストによって，確かにメッセージを伝達されているのだということが，観客たちの笑いや表情などの非言語的反応で確認された。さらに，観客たちの笑い声や表情の変化などによって，その反応が今度は逆に司会者やインタビュアーに感知されることになる。それが観客の興味を表明する歓声であれば，司会者によるトピックの発展が続き，また，理解に苦しむ表情が示されれば，インタビュー内容の明確化が促されるのである。実際，司会者どうし，司会者とゲスト，および，このような司会者・ゲストと観客といった多重構造の相互作用が，談話発展のストラテジーによってバランスよく展開していることが認められたのである。

また，ゲストとの親密度が高い場合には，司会者が特に「発話内容の検討」をゲストに多用することで，その人を冗談半分に批判しながらインタビューを発展させていることもわかった。この場合ゲストの方からも，「発話内容の組織立て」を積極的に司会者に適用し，談話発展の相互作用に貢献していることも認められた。さらに，ゲストの語りに対して，司会者が上記3種類の談話発展のストラテジーをその場その場にふさわしく駆使することにより話の焦

点を明確にし，また，語り内容の社会文化的特質を浮き彫りにして観客にアピールする過程をも捉えることができた。その他，司会者とゲストの対立によりストラテジーの遂行がゲストによって一時的に阻まれたり，司会者間の協力によってストラテジーが相乗的に機能したりといった，ストラテジー自身のダイナミックさも観察された。

以上のように，本研究において，単なる話し手と聞き手の相互作用だけではなく，その背後にいる第三者をいかに意識しながら会話をすすめるかという，より複雑な，しかし，現実に即したコミュニケーションの実態を捉えることができた。そして，このようなコミュニケーションが，4次元の多重構造の相互作用の中で，他の次元と関連し，刺激し合いながら進行しているということが解明できたと考えられる。

従来の談話分析的研究では，このような側面に関しては十分に光が当てられてなかったり，当然のものとして見過ごされていたりしたのだが，会話の自然な流れに詳細な考察を加えた結果，人間が他の人間の存在を意識したり，気配りをしたりする人間固有の活動が，会話の中で生き生きと営まれている事実を具体的かつ理論的に提示することができたと考える。これにより，相互作用的社会言語学の焦点である会話におけるダイナミックさの一面が浮き彫りにされた。この成果は，言葉を単なる1つの客観的な事実として考えるのではなく，それを発するわれわれ人間が常に存在しているということを意識しなければ得られなかったものであり，言語使用研究の重要性と意義深さを改めて認識させるものと言える。

論文審査の結果の要旨

本論文は，社会言語学の一分野である談話分析に基づく研究であり，日常生活における言語使用の場面に焦点を当てている。ここで扱っているのは，向かい合っている二者間の会話だけではなく，至近距離にいる観客という第三者を意識しながら進められるテレビインタビューであり，このような多層的な相互行為を分析することにより，人間のコミュニケーションのダイナミックさを明確化することを目指しているものである。データは，NHK 総合テレビの「スタジオパークからこんにちは」というインタビュー番組をビデオにより収録したものであり，それを相互作用的社会言語学に基づいて分析した結果，どのようなストラテジーによって会話が進行し，スタジオの観客をどのようにひきつけるのかについての実証的な検証を提示している。

本論文は7章からなる。第1章では，本研究における理論的枠組とその基本的概念・研究目的を提示し，先行研究の考察を行った上で，本研究の意義を述べている。さらに，本論文の理論的枠組である相互作用的社会言語学を他のアプローチと比較することにより，広大な裾野を持つ談話分析的研究における本論文の位置づけを明確にしている。第2章では，本データを採用した理由およびその有効性について諸点を叙述している。さらに，本研究において見い出された談話発展のストラテジーを具体的に例証している。第3章ではそのストラテジーの1つである，“formulating”（発話内容の組織立て）が，いかにゲストの発話の明確さを高め，観客が意味の推論を容易に行って積極的な聞き手としての位置づけを得るのに貢献しているかを経験的に考察している。第4章では，“topic control”（トピックコントロール）により，トピックの変化が導かれるだけではなく，トピックの進展がいかにスムーズになされるか，また，トピックに関連する質問や確認や依頼を行うことにより，いかに観客を刺激しながらトピックが深められていくかについての検証がなされている。第5章では，従来から幅広く研究がなされている“back channel”（あいづち）の現象をテレビインタビューのコンテクストに捉え直し，談話の発展における働きを浮き彫りにしている。第6章においては，上記のストラテジーについて，社会的相互作用という観点をよりいっそう強調することで，新たな角度からの考察を行っている。第7章では，研究のまとめを行った上で，メディアでの会話が実際，観客に対していかに歩み寄りを行っているものであるかという観点から本研究の考察を再確認している。また，ストラテジー全体を1つに図式化することにより，インタビュアーの位置づけの違い，スキーマ，コンテクスト，トピックフレームワークとの関係，ゲストの発話に働きかけた結果の相違などについての分析を有機的に提示している。さらに，本テレビインタビューにおいて4次元のコミュニケーションが相互作用的にどのような質的内容を包含しながら同時進行しているのかについて，本研究において明らかになった点をふまえ，図式化した。これにより，表面的には一見スムーズにコミュニケーションが行われているものの，その実態においては，広範で深遠なストラテジーが駆使される，複雑

なメカニズムが明らかにされた。

本論文の学界への貢献として，以下の3点が挙げられる。1）対象としたデータは，今回初めて談話分析の題材として使用され考察が行われたものであることから，メディアディスコース研究における新規の試みであるといえる。2）第三者が意識されていることが前提となっている状況を扱うという，これまでほんとど注目されたことのない，しかし現実的であるコミュニケーションの研究に取り組み，その実態を談話分析のアプローチを有効に活用することにより検証した。

3）相互作用的社会言語学の枠組および主要概念を先行研究に倣って援用しつつも，さらに，語り・繰り返し発話・直接話法といった，従来，離散的にしか扱われてこなかった諸現象を統合的に捉えることによって，現実の相互作用のダイナミックな実態を多角的に提示している。

もちろん，本論文にも次のようないくつかの問題点が残る。1）実際にテレビ局に足を運んで各参加者間の距離やカメラの位置づけ，全体的な雰囲気を感じ取ることによって，データ分析をより密度の高いものにする必要があること。2）4次元の多層構造の一部であるファックスを通したテレビ視聴者とスタジオの会話者との相互作用，およびインタビューの談話の流れに与える影響についての考察を深めること。3）今回の補足的な量的考察を将来的には統計処理可能なものとして提示できるようにすることである。

しかし，以上の諸点を考慮したうえでも，本論文は，従来の研究の水準を越える優れたものであり，博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものと認められる。